

【論文】

専門学校におけるクラス・コミュニティへの参加の意味 日本語支援の目的と方法の転換

三代純平*

概要

専門学校に留学する留学生は増加傾向にあるが、その現状はよく知られていない。本稿では、専門学校に在籍する韓国人留学生へのライフストーリー調査から、専門学校における日本語支援の在り方を検討する。調査から、韓国人留学生にとって、クラスというコミュニティへの参加が専門の学びを支え、留学生生活を充実させるために重要になっていること、そして、「日本語の問題」「境界意識の問題」によってそれが難しいと感じられていることがわかった。そのような問題を乗り越え、クラスへの参加を支える日本語支援が専門学校において求められている。

キーワード：クラス・コミュニティ、専門学校、状況的学習論、ライフストーリー、韓国人留学生

1 問題の所在

近年、専修学校専門課程（以下「専門学校」）に在籍する留学生の数は増加傾向にある。2007年の在日留学生総数 118,498 人の内、専門学校生は 22,399 人で約 20% を占め（日本学生支援機構, 2007）、専門学校生全体における留学生の割合は 10% を超えた（東京都専修学校各種学校協会, 2008）。一方、その実態調査や日本語の支援の在り方をめぐる研究はほとんど行われていないのが現状である。その背景には、専門学校に入学する留学生は専門的な学習を遂行する十分な日本語力があるという「前提」がある。だが、その基準は日本語能力試験 2 級以上、留学生試験 200 点以上、日本語学校での半年以上の在籍などであり、現実的には専門的な勉強に対応できる日本語力がない場合も少なくない。全国学校法人立専門学校協会（2006）が行った調査によると、日常会話ができない留学生、日本語が理解できないために授業についていけない留学生が多数いるという問題が多く、専門学校の留学生担当者から報告されている。そこには日本語教育として何らかの支援が必要となっている。そこで筆者は専門学校に在籍す

る留学生がどのような日本語支援を必要としているのかを韓国人留学生を対象に調査を行った。その過程で留学生が、クラスの中で孤立しているケースが多いこと、またクラスへの参加が専門学校での学習や生活を支えることが明らかになった。そこで、本稿では 3 名の留学生のライフストーリーを中心に、クラスへの参加を困難にしている要因を明らかにし、そのような困難を克服するための日本語支援が必要であることを主張する。

2 研究方法と研究概要

2006 年から 2008 年 10 月現在まで、筆者は専門学校へ通う、または通った経験のある韓国人留学生 13 人にライフストーリー調査を行っている。ライフストーリー法は「歴史的真相を確証するために調査をするわけではなく、語り手の経験や見方を探求するものである」（桜井・小林, 2005, p.51）とされる。本研究でライフストーリー法を採用した理由は大きく二つある。一つは、日本語支援の在り方を考える際に、留学生活の中でどのようなコミュニケーションを必要としているのかという生活全体からの考察が必要であるためである。次に、日本語の学びというものを客観的なスケールではなく、個人の生活誌に根ざした主観的な問題として捉えるためである。本稿では専門学校における留学生はどのような

* 日本学術振興会特別研究員 DC2, 早稲田大学日本語教育研究科 j_miy@hotmail.com

協力者	年齢	性別	専攻	日本滞在期間	インタビュー日
ソナイ	21	女性	服装関係	2006.3- 2008.10 現在	2006.7.17/2007.2.19/2008.4.12
ボミ	24	女性	服装関係	2006.3 - 2008.3	2007.2.20/2007.3.6/2008.3.23
ミラ	21	女性	観光関係	2006.3- 2008.10 現在	2006.7.25/2007.2.10/2007.7.11/2008.6.7

表1 調査協力者

人生経験の中で日本の専門学校への留学を選択し、留学生生活をどのように位置づけ、その中でどのように日本語を学んだと感じ、どのような日本語支援を必要としているのかをライフストーリーから明らかにすることを目的としている。尚、今回の調査は韓国人留学生に限定した。専門学校への留学生は中国・韓国・台湾で全体の9割が占められ（全国学校法人立専門学校協会, 2006）*1, これらの国々からの留学生の状況を調査する必要性が高い。それぞれの国の政策や社会状況に応じて専門学校への留学の目的などが異なることが予想され、またインタビューの際に日本語が苦手な留学生に対してはその留学生の母語を用いる必要があることから、本研究では韓国に限定することにした。

調査協力者（表.1）*2 のサンプリングは「理論的サンプリング」（木下, 2003）*3 に基づき行い、インタビューは一人につき2回から4回、1回あたり1時間から3時間行った。非構造化インタビューで、日本留学を決めるまでの経緯、留学生活における困難と学びを中心に自由に語ってもらった。インタビューの際の使用言語は主に日本語で、必要に応じて韓国語も用いた。分析には、インタビューをICレコーダに録音し文字化したもの*4、及びフィールドノーツを使用する。分析は仮説検証型ではなく、データに密着したグラウンデッドな方法を用い

た。桜井（2002）は、ライフストーリーの解釈に王道はなく、「あるのは一定のパースペクティブにもとづいた分析・解釈のさまざまな試みである」（桜井, 2002, p.172）という。本研究ではインタビューを中心としたデータを、「何を語ったか」という語りの内容、「いかに語ったか」という語りの形式から多角的な分析を試みた。その結果、専門学校の留学生にとってクラスへの参加が学習や生活を支えるために重要だということと多くの留学生がそれに困難を覚えていることが明らかになった。調査協力者13名中、実に11名がクラスにおいて日本人学生とコミュニケーションをとりながら人間関係を築くことが難しく感じていた。その理由は、日本語力の不足によりコミュニケーションができないと感じるということと日本人と留学生は考え方が異なり境界を感じるということの二つに大きく分類された。そこで本稿では、クラスに溶け込み、クラスというコミュニティの一員となり、その中でコミュニケーションから多様な学びを形成した留学生、日本語力の不足からコミュニケーションをとることができなかった留学生、日本人学生との人間関係に困難を感じている留学生のそれぞれ1名ずつを取りあげ、その3名のライフストーリーを中心に、専門学校の韓国人留学生に対する日本語支援のあり方について考察する。

以下が3名のライフストーリーの概要である。

■ソナイの場合 ソナイは小学5年生の時に独学で日本語の勉強を始め、韓国の外国語高校で日本語を専攻した。日本語を活かした進学をしたいと思い、日本にある服飾関係の専門学校に入学し、ファッションビジネスを専攻した。来日当初はクラスメイトとの人間関係などに苦しみ、韓国への帰国を希望していた。しかし、クラスに溶け込むことができるようになったことを契機に日本での生活に適応していく。その後、日本での就職を希望するようになり、2008年春に専門学校を卒業し、アパレル関係の会社に就職し、勤務している。

*1 2005年度に専門学校に入学した留学生12,630人中、中国人8,830人（69.9%）、韓国人2,266人（17.9%）、台湾人511人（4.0%）である（全国学校法人立専門学校協会, 2006）。

*2 調査協力者には仮名のもと論文の公表の許可をいただいている。また年齢は最終インタビュー時のものである。尚、3名の通う専門学校は首都圏にあり、それぞれその専門では有名な専門学校である。韓国に学生募集の事務所を持つなど留学生を広く受け入れており、全体の20%弱が留学生である。

*3 「理論的サンプリング」とは、データ分析と並行しながら、分析に基づき、さらに必要と思われる協力者にインタビューを依頼するという形式のサンプリングである（木下, 2003）。

*4 文字化は基本的に筆者が行ったが、本稿で取り上げるボミの語りの韓国語部分は文字化及びその翻訳をバイリンガルの韓国人に委託した。

■ボミの場合 ボミは韓国の大学でファッションを専攻していたが、より専門的に勉強したいと考え、大学を休学、日本の専門学校への進学を決めた。留学のために韓国の日本語学校で半年間勉強し、日本語能力試験2級を取得し、専門学校へ入学した。韓国で日本語能力試験の対策講座のみを受講していたボミは日本語で会話した経験がなく、留学後、学校生活に適應できずに苦勞する。日本での就職も諦め、卒業後は韓国へ帰国した。

■ミラの場合 J-pop を聞いて歌詞を自分で理解したいと思ったことが、ミラが日本語の勉強を始めたきっかけだった。その後、中学生時に韓国の日本語学校で日本語を学び、外国語高校の日本語科を卒業し、来日した。日本語や日本での生活に不安があったミラはワーキング・ホリデー制度で1年間、日本で働きながら、日本の専門学校への進学を準備した。ワーキング・ホリデーを終えたミラは観光関係の専門学校でブライダルを専攻している。専門学校へ進学するとき、同年代の友人ができることを期待していたが、進学後、日本人と友人関係を築くことは難しいと感じるようになり、普段は同じ韓国からの留学生と共に行動している。

3 クラス・コミュニティへの参加の意味

3.1 なぜ参加か

専門学校生にとって、基本的に中心となる生活の場は学校である。通常、専門学校は大学のような単位制ではなく、高校のようなクラス制度をとる。つまり、週5日間、たいていの授業を同じクラスで受講することになり、クラスというコミュニティ（以下、本稿ではクラス・コミュニティと呼ぶ）が生活の一つの基盤になる。調査の結果、多くの韓国人留学生は所属しているクラス・コミュニティの一員として、他の日本人学生と対等の立場で参加することを望み、そのためにクラスメイトとコミュニケーションを行うことを期待している。例えば、自分の日本語力に問題を感じていたボミは、1年生の終りに一度休学を考える。そのときに、クラスメイトとコミュニケーションをとりたいと強く訴えている。

ボミ [前略] 2年生に上がっても、これまでみたいにして終わることもできます。卒業はできるんだけど、宿題って言っても書くぐらいしかないから。それから他の作業するときは、グループですること、だから、グループ課題み

たいな？ それもこれまでみたいに自分の意見出さないで、裏で任されたこと、グループの人に言われたもの、それだけやってもかまわないけど、そうしたら卒業もできるけど、それは嫌なんです。クラスメイトとコミュニケーションもしたいしー [後略]^{*5} 2.74^{*6}

また、ソニイは、クラスメイトとの人間関係構築の過程が日本語上達の過程であり、専門の学習が充実していく過程であったと捉えている。クラスメイトとコミュニケーションを続けることで、日本語によるクラスメイトの会話に参加できるようになる。また日本語ができることで遅れがちだった専門の授業もついていけるようになる。そのことによりクラスメイトにも認めてもらえ、より人間関係も良くなると、「全部が、混ぜ合わせて (2.219)」よくなったと感じている。その中でも一番大きな変化を「クラスの人が好きになった (2.51)」こととし、その変化を支えたのはクラスメイトの会話に参加するための日本語力であったと語る。そして入学当初、クラスメイトの話す日本語についていけず、また日本人は冷たいと感じ、学校の課題にも苦勞していたソニイも徐々に学校に慣れ、人間関係も好転したことにより、学校生活に大きな満足を感じていた。

ソニイ [前略] いまは、学校もすっかり慣れてきてクラスのみんなも大好きだし、友達もいっぱい出来て、幸せです、最近。もう終わっちゃったんですけど、1年生。で、すごい自分をほめてあげたいって感じですよ。2.6

このように韓国人留学生たちにとってクラスメイトとの人間関係が重要になっていることが分かる。日本人の学生との交流を大切にしたいという理由に加え、専門学校での学びを充実させるために日本人との人間関係は必要なものとして捉えられている。多くの専門学校ではグループ活動が取り入れられている。ボミやソニイは市場調査などをグループで行い、ミラは模擬結婚式や実際の結婚式をクラス全体のプロジェクトとして行っていた。他にも調理関係の専門学校生は調理実習をグループで行っている。だからこそ、専門学校の留学生にとってクラスメイト

^{*5} 本稿でのボミの語りはすべて韓国語を日本語に翻訳したものである。

^{*6} 前の数字はインタビューの回数、後ろの数字は発話の順番を表わしている。

トとのコミュニケーションがより重要になっているのである。

ソーヤー (2006) は理系大学院留学生の学校生活に関するフィールドワークから、公私に渡り研究室の活動に参加し、そこで人間関係を築くことにより様々なリソースにアクセスでき結果的に研究も進むことを明らかにしている。Lave & Wenger (1991 佐伯訳, 1993) は実践コミュニティへの周近的正統参加こそが学習であるという状況的学習論を主張した。実践コミュニティとは実践を人びとが共同で行うことによって生起する活動によってつながれたコミュニティのことである (Lave & Wenger, 1991 佐伯訳, 1993)。その意味で、専門学校のクラスは、共同学習という行為を通じて実践コミュニティとなるといえる。その実践コミュニティへ参加していくことによって、専門学校による学びを達成できる。^{*7} つまり、留学生にとってクラス・コミュニティの活動にメンバーの一員として参加することが専門学校での学びを充実させ、留学生活における自己実現を図る上で重要になっているのである。それは、ソニイがクラスでの人間関係構築、日本語の上達、学校での学びの充実を同時の過程と捉え、そのことにより大きな満足感を得ていることからわかる。

3.2 クラス・コミュニティへの参加を阻む要因

だが、専門学校では、多くの韓国人留学生がクラス・コミュニティへの参加に問題を感じている現状がある。何がクラスへの参加を阻んでいるのだろうか。その原因は多様で複雑で個人的であることは言うまでもない。しかし、インタビュー調査を通じてしばしば語られたことは大きく二つのカテゴリーに分類できる。一つは授業を理解したり、クラスメイトとコミュニケーションをとったりするための日本語力が不足しているという「日本語の問題」である。もう一つは日本人と留学生、もしくは韓国人の間にコミュニケーションや人間関係の構築を難しくさせる考え方の差異を感じるという「境界意識の問題」である。

^{*7} Lave & Wenger (1991 佐伯訳, 1993) は、専門学校による学びが実際の社会実践と異なるディスコースによるため、社会に出て有用な学びになっていないことを批判しているが、本稿では専門学校での学びの有用性自体は考察の対象としない。但し、筆者が調査を行った留学生が通う専門学校では、その専門の業界で活躍する人を講師に招き、インターンシップを取り入れるなど実践的な授業が多いと聞いていることを付記しておく。

3.2.1 「日本語の問題」

専門学校の留学生担当への質問紙調査においても、日常会話もままならないなど一部の留学生の日本語が専門学校の授業に参加するのに十分でないことが指摘されている (全国学校法人立専門学校協会, 2006)。ボミもまたそのような学生の一人であった。ボミは韓国で日本語能力試験対策の授業を受けることで、2級を獲得していたが、入学前に日本語で会話したことは一度もなかった。このような学生が直接学校に入学し、日本語母語話者の学生と共に授業を受け、グループ活動をする際にコミュニケーションに問題を抱えることは想像に難くない。グループを作る時も日本語に問題がある留学生は最後まで取り残されるということがたびたびあるそうである。グループに加わっても、ボミが何か言おうとする頃には別の話題になっており、他の学生もボミには意見を求めず、簡単な仕事だけが指示される。これは、韓国の大学でファッションを専攻していたボミにとってはつらかったという。このように日本語ができないから孤立し、話す機会が得られないため、日本語の会話力もつかない、そして専門の学び自体も充実しないという悪循環があるとボミは語る。

ボミ 今日もその〇〇 (地名：インタビュー当日にクラス旅行があった) に行ったときに、私はA (韓国人の友人) と一緒に行動したんだけど、BさんやCさんみたいに、中国とか台湾の人って日本語上手くないじゃないですか。その人たち、みんな1人でいますよ。[中略] そういう風にみんな (日本人) が仲間に入れてくれないから、集まってるから、韓国人は韓国人で、中国人は中国人でいつも一緒にいるから、全然日本語が上手くならない。勉強にならないんです。そのレベルが、自分が日本語を始めたときに留まってるの。誰も話しかけてくれない。 2.78

自分の日本語力ではクラスに参加することはできないと判断したボミは日本語を勉強するために休学を決意する。

ボミ 休学しないで残って、勉強したいんだけど、すぐ2年生になるでしょ。そのときに周りとコミュニケーションできなかつたら今までと同じ状況で、私は話さないで学校に通わな

いといけないんです。話せないままで、みんなとも話せなくて、意見とかコミュニケーション全然できないし。そしたらまた同じ、日本語が話せないままでいるんですよ [後略]。 2.108

しかし、結局、ポミは休学しなかった。一度休学し韓国へ帰国した場合、復学の際にビザが出る保証がないという理由で学校側が進級を勧めたためである。そして、日本語が話せないまま卒業した。友達もできずに、希望していた就職も日本語ができないという理由であきらめた。そんな彼女は、2年間の留学について、思い出は何もない、卒業できたこと以外に留学してよかったと思うことはない、と帰国の前日に筆者に残念そうに語った。

3.2.2 「境界意識の問題」

日本語での会話に問題を感じていない韓国人留学生もクラスに参加できない場合があることもインタビュー調査から分かっている。その大きな要因として「境界意識の問題」があげられる。ミラも日本人と人間関係を築くのは難しいと感じている留学生の一人である。ミラはワーキング・ホリデーを終え、専門学校への進学を控えた二回目のインタビューの時に、アルバイトでは同年代の日本人がいなかったもので、同年代の日本人に会えることが楽しみだと語っていた。しかし、入学して一年が過ぎると「あたし、やっぱり日本人の子、いやだなんて。あたしと合わない。あの子たち、絶対裏であたしの悪口言ってる。4.114」と語っている。「日本人の子」「あの子」という三人称は「日本人」と「韓国人」の間に境界を引き、人間関係構築が難しいと述べる語り方において象徴的である。西阪(1997)はエスノメソドロロジーの立場から会話の中で「日本人」「外国人」という境界が引かれていく様子を分析しているが、ミラは自らの語りで「日本人」と「韓国人」の境界を引いている。小柳(2005)は多くのアジア系留学生が日本人に対して境界意識を持っていること、そしてそれが時にコミュニケーションの阻害要因になることを指摘している。

ミラは、一年生の二学期に授業の一環で模擬結婚式をクラス全体で企画した時に、「日本人が韓国人を無視している」と感じるという理由で日本人学生と対立し、その後、学校をしばしば欠席し、出席不足から有料の補講を受けた。二年生になり再び学校に通うようになったが、日本人学生とは距離を置く

ようになったという。

ミラ [前略] 普段の生活はやっぱり、留学生と付き合いが多いかな。なんか、個人的に日本人の子と会って、遊んだりはしない、学校の子は。4.186

筆者 なんで? 4.187

ミラ (沈黙2秒) なんていうか、あの子たちも誘ってくれないし、こっちから言うのもあれだしー この前、体育祭だったんですけど、打ち上げあったけど、参加しなかった。4.188

筆者 なんで? 4.189

ミラ (日本人学生も) 行く? とかも言わないし、(韓国人のクラスメイトと)二人で行きましようって、二人で打ち上げした。4.190

「境界意識」はどのように構成されるのか。この問いに本稿で十分に答えることは難しいが、さまざまな要因が複雑に絡み合いながら、日常の中で構成／再構成されていることがインタビューからわかった。まず、韓国人留学生の間で日本人は本音と建前があり信じられないという言説がある。これは韓国で歴史的に形成された日韓関係に対する感情と複雑に結びついた形で広く流通している(呉, 2006)。そしてこれはアルバイトの面接で、面接中は好感触であったのに関わらず不採用になったなど、日々の生活の中で再確認されていく。そして、人は固定観念を持つとそれに当てはまる情報を選び取り固定観念を強めていく傾向にある(上瀬, 2002)と言われるように、「信頼できない日本人」という感情を強くし、疑心暗鬼になってしまうこともある。

ミラ やさしい子がいっぱいいる。ほんとはどうかわからない。でも、それを疑う私が悪いと思う。あいつ、あたしにやさしいけど、裏の気持ちがあるんじゃない? とか。3.420

同時に日本人側からも「留学生」としてのまなざしを受けている。ミラはある授業で、留学生はどうせわからないだろうと言われ、留学生は後ろに集めて座らされた。他の授業では、グループ活動で偶然留学生だけのグループができると、留学生だけでは不安だからと日本人を加えられた。普段、留学生に対して好意的でよく褒めてくれていた先生だっただけに、やはり日本人は本音と建前があるのだと感じたとミラは言う。また「父」と言ったのを「お父さん」とクラスメイトに訂正されたり、簡単なことで

も毎回「わかる？」と確認されたりするという細かい経験一つ一つの中で境界は何度もなぞられていくのである。さらに最も「留学生」を意識するのは求人で「外国人不可」があまりに多いという現実と向き合う時だとミラは語る。つまり、来日までの経験や知識、日常での相互行為が複雑に関係し合い「境界意識」は構成されていくのである。

では、なぜ「境界意識」が問題なのか。一つは、「日本人とは合わない」と感じている韓国人留学生も同時に友達になりたいと思っていることがある。

ミラ [前略] わかってるのに、いちいち説明してくれる子が、一番いや。これ、知ってる？って、だって、筆記も全部終わってるのに、これ知ってる？って。今、授業中だから、先生の話聞いてって。後で説明してもらって。なんか、そんな気遣いじゃなくて、友達としての、気遣い。それをしてほしかったのに、大体は、外国人だからって気遣ってくれるのが、一番、いや。4.178

筆者 仲良くなりたいたと思うの？ 逆に、じゃあ。4.419

ミラ うん。思いますね、だって、あたし、日本で就職して日本で生きるんだったら、日本の学生時代の友達も必要だし、相談に乗ったりとか。だって、それ寂しくないんですか？ なんか、学校終わって、学校の友達は一切連絡しない。就職して、就職で、仲良くなった人は、その時は連絡してるけど、やめたら絶対連絡しないとか、寂しいんじゃないですか？ 4.420

このように日本人との間に「境界意識」を構成しながらも、それを越えていきたい、対等な関係で付き合いたいとインタビューで答える韓国人留学生は多い。中にはインタビューで日本人との人間関係には関心がないと述べる留学生もいる。だが、話をしているうちに本当は友人が欲しいと述べる場合も少なくない。ポミとミラも途中、日本人の友人は別に欲しくないと語っているが、話を丁寧に聞いていると実は日本人学生と一人の友達として付き合いたいという気持ちを抱いていたことがわかった。人間関係に関心がないというのは、人間関係構築が困難な状況の裏返しである場合もあることに注意すべきだろう。

さらに、日本人学生との交流と専門の知識・技術の習得は密接に関係している。共同学習が中心になる専門学校において、クラスメイトとの良好な関係が築けなければ、専門の学習自体にも影響が出る。クラス・コミュニティへの参加は日本語によるコミュニケーションや専門の学びと一体なのである。また多くの専門学校に在籍する韓国人留学生のようにミラも日本での就職を望んでいるが、人間関係に問題があった時期に学校を休みがちになり、出席率が悪いという理由で学校からの就職推薦が受けられない状態での就職活動になっている。だからこそ「境界意識の問題」は考慮すべき問題なのである。

4 コミュニティへの参加を支える日本語支援へ向けて

専門学校の韓国人留学生にとって、クラス・コミュニティへの参加が留学生活の学びを支えることと、「日本語の問題」や「境界意識の問題」といった要因によりそれが難しい状況を考察した。確かに、この二つの問題は勉強不足など留学生の個人的問題に起因する側面もある。だが、留学生を受け入れる側の制度・環境の整備が必要になっていることは言うまでもない。ビザなど制度の整備に関する問題はいろいろある。^{*8} 専門学校の留学生受け入れの制度的な問題を包括的に論じるためには稿を改めなければならない。但し、日本の人口減少に伴い留学生受け入れ拡大が必至の状況で、「東京都留学生受け入れに関する自主規約」が作られるなど、専門学校も受け入れ体制の改善を試みている（東京都専修学校各種学校協会 ほか、2006）。一方で、日本語支援体制を整えることが重要になっているが、そのあり方に関する議論はほとんど行われていない。日本語支援の重要性は認識され、多くの専門学校で放課後に日本語支援クラスが設置されている。また大きな専門学校では日本語学校が併設されているところもある。だが、支援の質を問う議論は十分には行われていない。その背景には、ビザ等の事務や生活指導を行う常勤職員はいるが日本語支援の常勤教員がいることは極めて稀であることや、それに伴い、日本語教育側も専門学校の留学生に対する日本語教育についてほとんど議論してこなかったことがあるだろ

*8 例えば留学生は就労ビザへ在留資格変更をする際に「人文知識・国際業務」「技術」のカテゴリーで就職しなければならぬため、調理専門学校などで学ぶ多くの留学生にとって就職は狭き門になっている。

う。では、どのような日本語支援が必要になっているのだろうか。

現在、多数の留学生が在籍する多くの専門学校で行われている日本語支援のクラスは、週1、2回の放課後クラスで、非常勤の日本語教師が日本語能力試験などの資格試験対策を行うという形態になっている。つまり「付加的」な形での日本語支援なのである。しかし、ボミがクラスメイトとコミュニケーションをとるために日本語を学びたいと強く主張していたように実際の韓国人留学生にとって、資格試験も重要だが、目の前のコミュニティであるクラスにどう参加していくのかということがより切実な問題となっている。

また、留学生に必要な日本語が非常に「道具的」に捉えられている。日本語は知識として与え、道具のように使いこなせる何かとして考えられているのである。細川（2007）は日本語教育が、現実社会へ参入する前の事前準備として捉えられることを「準備主義」として批判しているが、専門学校の日本語支援においても同様の問題が指摘できる。専門の勉強に参加するための事前準備として「道具」としての日本語を教えるという考え方が根強い。だから、「付加的」な日本語支援が行われる一方、日本語学校経由の入学が推奨されたり、自前の日本語学校を併設し、その卒業生を専門学校に入学させたりする。だが、そこでの日本語支援に、いかにクラスに参加していくことを支えるかという視点はみられない。だからこそ、多くの留学生は、ボミやミラのようにクラス・コミュニティへの参加に問題を感じているのである。

専門学校の日本語支援を充実させるためには以上のような「道具的」な日本語観に支えられた「付加的」な日本語支援の目的と方法の転換が必要である。「道具」として日本語を与えるのではなく、実際のコミュニティへの参加のためのコミュニケーションを支えるという目的を持ち、資格試験対策のような「付加的」な形で行うのではなく、学校というコミュニティ全体で留学生の学校生活を支えるための方法として、日本語支援の在り方を模索することが求められている。

ソニイはクラス・コミュニティに参加することで日本語も上達するし、学業も充実すると感じていた。ボミやミラは「日本語の問題」「境界意識の問題」からクラスへの参加に困難を感じていたが、同時にクラス・コミュニティの一員となり、皆と対等

の関係で学べることを希望していた。状況的学習論は、実践コミュニティへの参加を学習とみなしているが、専門学校では、クラス活動という実践を通して形成される実践コミュニティにいかにか日本人たちと対等の関係で、「留学生」「日本人」という「境界意識」のもとにはなく、同じコミュニティの一員として、言うならば「私たち」という一人称で自分たちを表現できるような関係で、参加していくかが重要になっている。ならば、日本語支援もこのクラス・コミュニティへの参加を支えるという観点から検討されるべきではないだろうか。ソーヤー（2006）は、理系大学院留学生が研究室の活動に様々な参加していく過程と参加出来なかった過程を対比し、留学生への日本語支援は、留学生がコミュニティへ参加する機会をデザインすることであると主張する。専門学校における留学生支援においても、留学生がどのようにすれば、クラス・コミュニティへ参加し、人間関係を築けるかということから、学習環境をデザインしていく日本語支援が必要になっている。これは、放課後の試験対策授業のみで十分でないことは明らかである。また、留学生のみを取り出し、日本人とのソーシャル・スキルを訓練するなどの支援にも筆者は懐疑的である。倉地（1992）が主張するように、実際の人間同士の相互作用を通じてしかコミュニケーションは学べない。Wenger（1998）は、実践コミュニティへの継続的な参加は抽象的なカテゴリーよりも人びとを強く結びつけると述べる。そのような参加によってこそ「境界意識」を乗り越えることができるのである。加えて、留学生がクラス・コミュニティへ参加することは留学生個人の能力の問題よりも、クラス・コミュニティ全体の問題として考えるべきだと思われる。「付加的」な支援ではなく、クラス・コミュニティが日本人、留学生問わず対等な一員として活動できる実践コミュニティとして成長することを目的とし、クラス活動と関連した形で、日本人のクラスメイトも巻き込みつつ、日本語支援が企画されていかなければならない。より学校全体のカリキュラムと密接につながった形での日本語支援であるべきなのである。

以上、議論してきたように、留学生の学びを支えるためには、クラス・コミュニティへの参加がとても重要な意味を持っている。専門学校の日本語支援はその観点からデザインされる必要がある。従来、専門学校における日本語支援は日本語教育関係者の大きな関心を集めてこなかった。しかし、一方で専

門学校の留学生受け入れは大きく推進されている。日本語学校での準備的な支援や放課後の日本語クラスにとどまらない支援が今後期待されている。そのためには、留学生受け入れにあたる関係者、専門学校の担当教員と日本語教育関係者の連携が重要になるであろう。日本語支援の具体的な方法は専門学校ごとの状況により異なる。ただ、支援は、実際のクラス・コミュニティのメンバーとの関係構築へ向けた相互行為の場を創出し、そこで留学生が体験する困難に寄り添いながら、共にコミュニケーションを続けていく形でなければならないと筆者は考えている。そのためには、日本語教育機関と専門学校が学生のポートフォリオを共有するなどの留学生の生活支援を核とした連携を行うことや、クラス・コミュニティを支えるコミュニケーション教育をカリキュラムに位置づけ、そこに日本語教育関係者が関わっていくことが必要であろう。

文献

- 呉正培 (2006). 韓国人大学生の日本人ステレオタイプに関する質的研究——日本語学習の影響を中心として『日語日文学研究』59, 275-296.
- 上瀬由美子 (2002). 『ステレオタイプの社会心理学——偏見の解消に向けて』サイエンス社.
- 木下康仁 (2003). 『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践——質的研究への誘い』弘文堂.
- 倉地暁美 (1992). 『対話からの異文化理解』勁草書房.
- 小柳志津 (2005). アジア系留学生にみる境界意識——文化規範が本質的に捉えられるのはなぜか『異文化間教育』22, 80-94.
- 桜井厚 (2002). 『インタビューの社会学——ライフストーリーの聞き方』せりか書房.
- 桜井厚・小林多寿子編著 (2005). 『ライフストーリー・インタビュー——質的研究入門』せりか書房.
- 全国学校法人立専門学校協会 (2006). 『専門学校における留学生受け入れ実態に関する調査研究報告書 平成 17 年』全国学校法人立専門学校協会.
- ソーヤーりえこ (2006). 理系研究室における装置へのアクセスの社会的組織化 上野直樹・ソーヤーりえこ (編) 『文化と状況的学習——実践, 言語, 人工物へのアクセスのデザイン』(pp.91-124) 凡人社.
- 東京都専修学校各種学校協会 (2008). 『平成 19 年度専修学校各種学校調査統計資料』東京都専修学校各種学校協会.
- 東京都専修学校各種学校協会・国際交流事業委員会・留学生対策委員会・東京都留学生受け入れに関する自主規約運用委員会 (2006). 『留学生受け入れガイドブック 第 6 版』東京都専修学校各種学校協会.
- 西阪仰 (1997). 『相互行為分析という視点——文化と心の社会学的記述』金子書店.
- 日本学生支援機構 (2007). 『平成 19 年度 外国人留学生在籍状況調査結果』日本学生支援機構.
- 細川英雄 (2007). 日本語教育学のめざすもの——言語活動環境設計論による教育パラダイムの転換とその意味『日本語教育』132, 79-88.
- Lave, J. & Wenger, E. (1991). *Situated learning: Legitimate peripheral participation*. Cambridge University Press. (レイブ, J. ・ウエンガー, E. 佐伯胖 (訳) (1993). 『状況に埋め込まれた学習——正統的周辺参加』産業図書.)
- Wenger, E. (1998). *Communities of practice: Learning, meaning, and identity*. Cambridge University Press.
- [付記] 本研究は、科学研究費補助金 (特別研究員奨励費) 「韓国人留学生の留学生活における学びの形成に関する調査研究」(2008 年, 課題番号 20・6294) の研究助成による成果の一部である。